經濟論叢

第七十九巻　第三號

故谷口吉彦博士、故松岡孝兒博士遺影ならびに署名

観光税の問題点……神戸正雄　1

米国海外投資の成熟と停滞……岡田賢一　14

財政学と国家認識……斎藤博　37

故谷口吉彦博士略歴・主要著書論文目録……　55
追憶文（石川興二・松井清・河野健二）

故松岡孝兒博士略歴・主要著書論文目録……　69
追憶文（中川与之助・中谷実・酒井一夫）

昭和三十二年三月

京都大學經濟學會

谷口先生がのこされたもの

松井　清

わたくしが谷口先生のゼミナールに参加したのは、昭和七年（一九三二年）であった。当時は谷口先生の学問的生涯のなかで第二期に当るということができるであろう。わたくしは先生の学問的生涯を四つの時期にわけて考えている。第一期は大正十一年大学卒業から昭和三年海外留学を終って帰国されるまでの時期。この時期における先生の研究の中心は、恐慌理論、景気変動論などにあり、恩師河上肇博士の影響が一番つよく感じられる。第二期は昭和三年の帰国から昭和十年頃に至る時期であり、先生の学位論文となった「商業組織の特殊研究」などを通じて、実証的研究の領域を開拓された時期である。戸田海市教授の跡を継いで、商業経済を専攻されるようになったことが、その後における先生の方向を決定することになるのであり、その基礎はこの第二期に定まったと思われる。昭和七、八年頃赤煉瓦の研究室で、米穀に関する尨大な統計資料と取組んでおられた先生の面影を、わたくしはいまも忘れることができない。この時期に見落してはならぬのは「購買力補給案」（ネオ・インフレーション）であろう。素朴な形においてではある

が、ケインズ的な不況対策を、ケインズ以前に提唱されたものであり、時事問題についての先生の思付きのよさを示す代表的な仕事である。第三期は昭和十年頃から終戦に至る戦争時代であり、当時進行しつつあった国家独占資本主義化の傾向が、先生の学問にも影響することになる。「貿易統制の研究」や「東亜綜合体の原理」などが、この時期の産物である。第四期は戦後追放の期間を経て学界に復帰され、昭和三十一年死去されるに至る時期である。この時期は、いわば自己反省の時期であり、先生は卒直に戦争中における誤りを正し、本来の自己を取戻そうとされていたように見うけられる。日中貿易の問題に情熱を傾けられたことは、中国人民に対する先生の贖罪のお気持から出たものとわたくしは確信している。

われわれの先輩である名和統一教授、相沢秀一教授などがやはり谷口ゼミの出身であり、同僚の島教授もわたくしと同じく昭和七年の谷口ゼミに参加している。すなわち第一期から第二期にかけて先生の門をたたいた者の多くは、先生の学問のうちにみられた河上博士の伝統にひかれていたといえないであろうか。もちろん河上博士と谷口先生の学風は非常にちがっている。河上博士が宗教的にみえるまでに理想主義的であったのに対し、谷口先生はどこまでも現実主義的であった。また先生の学ばれたマルキシズムには、留学当時ドイツ社会民主主義者たちからうけた影響が非常に強い。しかしそれにも拘らず、先生がその学問的生涯の出発点においてうけられた河上博士からの影響は、先生の生涯を通じて失われなかったし、やはり先生は河上博士の系譜に連なるべき人であると、わたくしは考えたい。

戦争中における社会民主主義の運命は、各国の経験が示しているように、少数の例外をのぞいて、大部分の人達を、社会ファシストの協力者とするものである。わたくしは二十年来の門弟として、谷口先生が徹頭徹尾平和を愛する人であったと信じている。しかし戦争は、このよき先生をして、戦争協力者たらしめたのである。戦後の追放生活がいかに先生のお心を暗くしたかを思うとき、わたくしは今更のように戦争というものの罪の深さを痛感する。追放期間中先生のお宅に参上し、失礼をかえりみず、戦争中における先生の文筆活動について、自己批判していただくようお願いしたときのことを、わたしは永久に忘れることができないであろう。その場で先生はなんら意見をのべられなかったけれども、その後における先生の行動から次第に明らかになってきたことは、わたしたち門弟の意見をも十分にとり入れて、平和を愛する研究者としての自己をとりもどされつつあることであった。日中貿易の復活に示された異常な熱情も、そのあらわれであったし、四国の香川大学に赴任されたとき、「先生は何党を支持されますか」との新聞記者の問に対し、はっきりと「左派社会党」と答えられたということも聞い

ている。第三期学術会議会員として御一緒に仕事をしたときも、先生はつねに平和を擁護しようとする科学者たちと行動を共にされた。

わたくしはどう考えても、先生にとってよい弟子であったとはいえない。先生の温情あふるる御指導にたいして、むくゆることの余りにも少なかったことを恥かしいと思う。しかし問題はより多く今後にのこされている。谷口先生の学問的生涯が示しているように、真実を守るという仕事は、容易ならぬ仕事である。われわれ、といって悪ければわたくしの弱さにむちうちながら、この容易ならぬ仕事を果し、河上博士以来の光栄ある系譜に連らなることこそ、先生のはかりしれない学恩に答える途であろう。